

エッセイ

シャガール・オタクは歌う

とし ち うえ ち
寿 上 樋

(大阪国際大学非常勤講師、1992年大学文学部卒業)

二〇〇二年度は国内で二つのシャガール展が開催された。ひとつはロシア国立トレチャコフ美術館所蔵の大作《ユダヤ劇場壁画》をメインとする、シャガールのロシア時代（一九〇六～一九二二年）の作品にスポットを当てたもので、いまひとつはフランス、ジョルジュ・ポンピドゥーセンターとシャガール家が所蔵する、初期作品から晩年の作品までの油彩画を幅広く紹介するものであった。日本でのシャガール人気は、京都市美術館でも開催された前者のシャガール展入場者がひと月の会期で十万人余り、という数字が物語るように、相当なものだ。シャガールと言えば今さら説明するまでもなく、絵の中を自由に浮遊するカップルや動物たち、画面からあふれんばかりの華麗な花束のモチーフ、そしてシャガール・ブルーと言われる鮮やかな青や、燃えさかる赤などの大胆かつ奥深いニュアンスを奏でる賑やかな色彩が、いわゆる夢のようなイメージを醸し出し、僕らの目とところを惹きつける、あの絵の作家である。

そのシャガールについての研究が僕の目下の課題である。「シャガール研究者なんて、バカや!」と、つい先ごろもほろ酔い気分をだいぶ超過したご様子の紳士に一喝されたばかりであるが、なるほど、そのお言葉には素直にうなずくしかない。多かれ少なかれ、研究者とは、オタク、すなわち一種のバカでなければ動まる仕事ではないのだから。けれどもあまりにも微に入り細に入り過ぎてそれだけで自己完結してしまうと本当にただのバカで終わってしまう。たとえバカであっても、その活動が自分の人生と社会との接点として機能していなければ存在意義がない。研究という仕事は、書棚と資料の山に囲まれながら進められ、閉鎖的な学会でごく一部の人間だけに開示される

もの、というイメージは、研究のほんの一側面を語っているに過ぎない。そういう場合もある、というだけだ。研究とは、自らの生き方に方向性と推進力をもち、そして社会とのつながりの中で進められるものだ。未来への望みを期待させるようなメッセージが託されるべきものなのだ。

では、いったい「シャガール研究」とは、どんな仕事なのか？—それは十九世紀末から二十世紀の大部分を奇跡的に生き抜いたロシア系ユダヤ人であり芸術家であったひとりの人物の生い立ちに寄り添うことである。それは未曾有の悲劇ホロコースト（ユダヤ人大量虐殺）を可能にしたナチズム、十九世紀末から二十世紀初めにかけてロシアや東欧諸国で繰り返されたボグロム（反ユダヤ暴動）、そしてそれらを生み出した反ユダヤ主義、カトリック急進派の宗教的不寛容主義と手を結んだ帝国主義、西欧列強およびそれと与するものによる植民地支配、異なる文化に属する人間を未発達者として蔑む人種差別、という実にさまざまな、また今日の問題と向き合うことなのだ。つまりは「大問題」。先ほど思い描いたシャガールの絵の夢のようなイメージとはまったくかけ離れたキーワードのすべてがシャガールに繋がっている。知っているつもりになっていたシャガールについて、いかに僕らは「無知」か。ところが、ひとたび「シャガール展」を催すや、わずかに月で十万人を動員してしまう日本のシャガール「大人気」は一体どうしたことか。「大人気」の向こうには、荒涼たる「無知」の大平原が広がっているように思われる。

しかも、この「大問題」と「大人気」のギャップは一般の芸術愛好家のみならず芸術研究者についてもほぼそのまま当ては

まるのではないか。だから、浮遊する恋人たちや画面いっぱいの色鮮やかな花束で僕らを惹きつけるシャガールの絵がおよそ「研究対象」などになるはずがない、と考える指導的立場は今なお少なくないことだろう。そもそも「学術論文」とは一種の「現場検証報告」のようなもので、査読する人の心を動かすようなものはそれには属さない、ということだ。いかに作品に心惹かれ、興奮に胸躍らせながら調べようと、徹頭徹尾、感情を抑制し、資料と照らし合わせて確認可能な事実のみを論述するという崇高なる禁欲主義に献身、従属すること—それが学術的研究と称するに相応しいものだ、と。そうならば、僕なんかにはとても不可能、そんな「従属」はガマンならない。なぜなら、それは研究対象がもつ真実（リアリティ）を伝えることと大きく矛盾すると思うからだ。

僕は研究者であると同時に、表現者でもありたいと思っている。表現者であるからには、その先には特定されることのない、多数の受け手が想定されている。だから必然的に研究「領域」という区画は取り払われなくてはならない。つまり「越境」は不可欠となる。研究対象が示してくる鉱脈を辿っていけば、必然的に唯一の領域に留まっていられるはずはなく、いくつもの学問領域を行き来することになり、また実際の地理上の「越境」も必要になってくる。対象が関わった地理上の「場」や、思想の世界の「場」そのものに身を置きつつ、対象が残したわずかな余韻を感じ取りながら考えることが必要だ。そうすれば、次には自分がどこへ行けばよいのか、何に取り組めばよいのか、という問いの答えが示唆されるのだ。この何年かを思い起こせば、さまざまな人との出会いは偶然だったのかもしれない。け

れども、その場その場の余韻を感じ取り、頭の向きを変えたその瞬間に、新たな出会いは訪れていた。だから、それぞれの出会いは必然だったということもできる。

さて、シャガールは一八八七年、当時の白ロシア、現在のベラルーシのヴィテブスクに生まれた。その当時、ロシアのユダヤ人は反ユダヤ的な政策によりシユテートルと呼ばれるユダヤ人町に限り居住が許されていた。彼が育ったのもそうしたシユテートルのひとつである。その町の光景は、ごく初期の作品から、晩年の作品まで繰り返し描かれており、僕らも知らず知らずのうちに親しんでいる。それらの絵の中に描かれた人々はイディッシュと呼ばれる言語を日常語として生活していた。イディッシュ (Yiddish=ユダヤ語) とは、中世ドイツでユダヤ人が隔離されたゲットー内で使われた言語で、ドイツ語を母体としながらも、彼らの離散に伴ってヘブライ語、フランス語、英語、スラブ系言語など、離散地の言語が混じりあつた独特の言語となつた。ホロコーストで殺害されたユダヤ人の多くがこの言語の話し手だったこともあり、奇跡的に生き残つたものを除けば純粋なネイティブ・スピーカーはもうほとんどいないという。イディッシュは、その「耳障りの悪さ」——もちろん、そんな言語などひとつもないと思う——から、しばしば迫害の口実を与えてしまつた。確かにこの言語は離散と迫害のなかで育まれた「不幸な」言語かもしれない。とはいえ、他の言語と同じく、人々の感情を表現するのに不足があつたわけでは決していない。それどころか、幾世紀にもわたつて人々の深い憂いや苦しみ、わずかな喜びや希望を託す大切なこころの拠り所となつたことは、多くのイディッシュ説話が、そしてイディッシュ民謡が雄

弁に語っている。シャガールは、町で行われる結婚式で口ずさまれるイディッシュ民謡に何度となく耳を傾け、自らも歌つたことだろう。そして、彼自身も伯父と同じくフィドル (ヴァイオリン) を手に取り、そのメロディーを奏でたことだろう。その「事実」はべつに何かの文献資料に明記されているわけではない。けれどもそれは、作品をよく観れば「感じられる」ことなのだ。婚礼の行列を先導する音楽家クレズマーたちの姿は、彼が画業を開始した直後の一九一〇年ごろにはすでに何枚も描かれているし、僕らがよく目にしてゐる恋人たちの周りにも、いつも寄り添つて演奏している。彼らクレズマーが奏でるメロディーは、おそらく日本の愛唱歌にもなっているイディッシュ民謡「ドナ・ドナ」のような哀愁を帯びたものや「マイム・マイム」のような輪になつて踊らう的なダンス曲だったことだろう。シャガールがいたような東欧のシユテートルで行われた結婚式では、式の始まりから終わりまで、このクレズマーが大活躍した。「クレズマーのいない結婚式など、だれも涙を流さない葬式よりひどい」と言われたほどだ。多くの場合、フィドルやクラリネットがリードを務め、打弦琴ツィムバロンやドラム、コントラバスやチューバなどが伴奏した。彼らはいわば流れ仕事の楽士たちで、楽譜を使わず、師匠から弟子へと演奏そのものを通してそのノウハウが伝えられた。また彼らは「越境」を繰り返し、各地で色んなミュージシャンと共演したために、様々な地域の旋律が混じりあつて民族音楽のミックス・ジュースのような響きを持つている。

シャガールが一九二〇年、ロシア革命後のユダヤ文化解放運動の中で誕生する運びとなつた「ユダヤ劇場」のために描いた

初期代表作《ユダヤ劇場壁画》でも、このクレズマーは中心的な役割を担っている。この作品と六年半ぶりに対面した昨年、僕はある試みについて考え始めていた。それは、《ユダヤ劇場壁画》をはじめ、シャガールの膨大な数の作品の大部分に描きこまれているクレズマーに自らの手で息を吹き込むこと、つまり、今も絵の中で演奏し続けている彼らの音をこの場で響かせることである。僕は「偶然にも」、研究とは全く別に、ジャズの演奏活動を続けてきた。ところがそのジャズのスタンダード曲のなかに、イディッシュ民謡の流れを汲むものが少なくないことに最近になって気付いたのだ。アンドリュース・シスターズが英語ヴァージョンで歌って有名になった、イディッシュ・ミュージカル「I would if I could」の挿入歌「素敵なあなた（*Bai mir bisru shein*）」などはその代表的なものだ。十九世紀末から二十世紀初めにかけて東欧からポグロムやナチズムの魔手を逃れて渡米したクレズマーたちは、ジャズメンとともに舞台で演奏していたし、あのスイング王ベニー・グッドマン（彼もユダヤ系である）が一九三八年のカーネギー・ホール公演でクレズマー風のアレンジで「素敵なあなた」を演奏していたのも、考えてみれば自然な状況だった。彼らは、同じくポグロムを逃れて流亡してきた離散ユダヤ人を前に演奏していたのだ。

ここへ来て、僕の研究は、「別腹」で続けていた演奏活動とひとつになった。

研究を進める中で「偶然に」出会ったひとりの研究者の計らいで、昨年六月、宇都宮美術館でシャガールの作品についての講演をすることになった。そして、その折に自らクラリネット

でクレズマーの音楽をちよつとだけ、演奏してみることにしたのだ。一本調子の作品解説の間は居眠りしていた聴衆も、僕がクラリネットを取り出して演奏を始めるや否や、顔を上げ、僕が繰り出すリズムに合わせて手拍子が鳴り始め、演奏が終わるとまるでコンサート会場のように拍手が沸き起こった。演奏したのはたった一曲である。にもかかわらず、そのわずかな時間、その会場は一体化し、一瞬にして生気がみなぎったのだ。僕はクレズマーの持つ力を初めて実感した。この時の感触が、僕を次の新たな機会へと向かわせることになった。四カ月後の十月初め、異文化交流が盛んな街、神戸で、政治的には対立が続くアラブとユダヤの音楽を紹介し、平和の尊さを共に考える、というイベントを催すことになった。その時は二人の演奏家とともに本格的なクレズマーの編成で演奏に臨んだのだが、会場を埋めた百六十人の聴衆は、僕ら三人の演奏に顔を輝かせて一斉に手拍子を鳴らした。そして「ドナ・ドナ」の演奏では百六十人が「ドナドナ、ドナナ……」というあのリフレインを大合唱し、またもや一瞬にして他人同士はひとつの心となったのだ。

絵の中のクレズマーたちに、彼らの言語＝音楽でこちらから呼び掛けることで、彼らは生き生きと息を吹き返し、こちらを向いて共に響き返してくれるのではないか。それは、シャガールの世界が持つ真実（リアリティ）、彼があらゆる作品に託した未来へのメッセージ「愛」と直接的に——文献資料を通してではなく——同化する体験になるだろう。

僕は今年、新しいシャガール・オタクとしての道を歩もうとしている。

♪

エッセイ

孤独と戯れる心

「親指コミュニケーション」からの脱却

諸井 克英

(女子大学現代社会学部教授)

加速する「親指コミュニケーション」

電車の中で携帯電話機を見つめながら人々が黙々と「親指」を細かに動かしている風景は、もはや異様なものとはいえなくなった。さらに、この「親指コミュニケーション」に連動する「出会い系サイト」は、種々の犯罪の「元凶」として認知されている。「メール」が対人相互作用の一つの重要な手段になったばかりか、未知者との「出会い」を日常的に演出してくれる「出会いの作法」が出現したのである。

中学生・高校生(東京都内)を対象とした最近の調査(警視庁生活安全部少年育成課 二〇〇二)は、この新たな「出会いの作法」が青少年の間でかなり一般的であることを示した。「出会い系サイトへのアクセス経験をもつ者」、「実際に相手と出会っていた者」、「交際継続中の者」は予想通り確固とした割合で存在するのである。

本稿では、「親指コミュニケーション」の出現をメディア的文脈から整理する中で、「元凶」が携帯電話機という機械的装置自体にあるのではなく、「孤独と戯れる」ことができなくなった若者の心性にあることを孤独感の観点(※1)から示したい。

変貌するメディア装置と 携帯電話コミュニケーション

わが国では明治中期に電話の実用化が開始された。近年の電話機の飛躍的普及によって、生まれたときから電話に馴れ親しんでいる世代が社会の中心層を占めるようになった。しかし、ここ数年間のわが国における携帯電話機の急激な普及は、インターネットの拡大と相関しながら、対人コミュニケーションの様相を変貌させた。

わが国の場合、インターネットの浸透よりも、むしろ「ポケベル」の一時的急増やその後の「携帯電話機」の飛躍的普及のほうメディアに関わる顕在的現象となった。まさに、「身体化されたメディア機器」の飛躍的普及が先行したのである(※2)。携帯電話機の人口普及率も今や五〇%を越え、低年齢層へも浸透している。最近の全国調査を見ると(毎日新聞 二〇〇一第四十七回学校読書調査、中学生・高校生の多くが携帯電話機の使用目的として「友だちとのメール」を挙げている。つまり、「文字コミュニケーション」を営むためのツールが低年齢層へと確実に浸透したのである。ここに、インターネット装置の中に組み込まれた「電子メール」とは異なる流れ、すなわち「ポケベル→携帯メール」の流れを嗅ぎとることができる。

「ポケベル」から「携帯電話機」への移行は、「端末売り切

り制」の導入に伴う携帯電話機の値崩れが大きな契機となった。この移行の基底には、単に安価ということだけでなく、文字よりも音声という豊かなコミュニケーション・メディアへの志向性がある。しかしながら、携帯電話機にメール機能が装備されることにより、「文字コミュニケーション」という「劣位であるはず」のコミュニケーションへの「不可思議な」回帰が生じたのである。

孤独感を癒す装置としての携帯電話機

この携帯電話機による「メール・コミュニケーション」すなわち「親指コミュニケーション」は、「ポケベル」によって引き起こされた「ベルフレ現象」の基底にある「未知者との出会い」と「つながり感」という要因を継承した「メル友現象」をもたらすことになる。さらに、携帯電話機にインターネット機能が付加されることによって、インターネット系サイトの中で既に氾濫していた「出会い系サイト」(※2)の考えが携帯電話機にも侵入し、種々の事件を引き起こした。

もはや携帯電話機は、従来の固定式電話機の延長線上に単純に位置づけることはできず、「インターネット」系の流れと合流した「モバイルマルチメディア」装置となった。これには、「使えるiモード」のキャッチフレーズで登場したNTTドコ

モによる「iモード」が大きな役割を果たしている。携帯電話は、固定電話機での「テレフォン・クラブ」や(※3)、インターネット系での「出会い系サイト」(※2)に象徴される、「親和欲求充足装置」としての側面を継承し、「ポケベル」のもつ「身体化されたメディア」という特徴をもつ、新たなメディア機器と化したのである。

近年指摘されている「徒党時代の様相の変化」に起因する対人関係の希薄さを前提にすると、若者たちは孤独の迷宮を彷徨し続ける。その孤独感を背負った若者たちが「つながり感」を求めて「親指コミュニケーション」を際限なく営む。送受信メール量やアドレス帳への登録人数が孤独を癒す安心感を与えてくれるのである。このように、新たな形式のコミュニケーションの創出は、変貌する対人関係と関連しているのである。

「親指コミュニケーション」から 「孤独との戯れ」へ

「親指コミュニケーション」の風景や「出会い系サイト」への群がりの基底には、満たされない日常に由来する対人関係へのいわば強迫的な切望がある。孤独感という概念を据えることによって若者が創出する「奇異」な現象をいったんは理解できる。

孤独感とは、図に示すように、対人関係についての願望水準

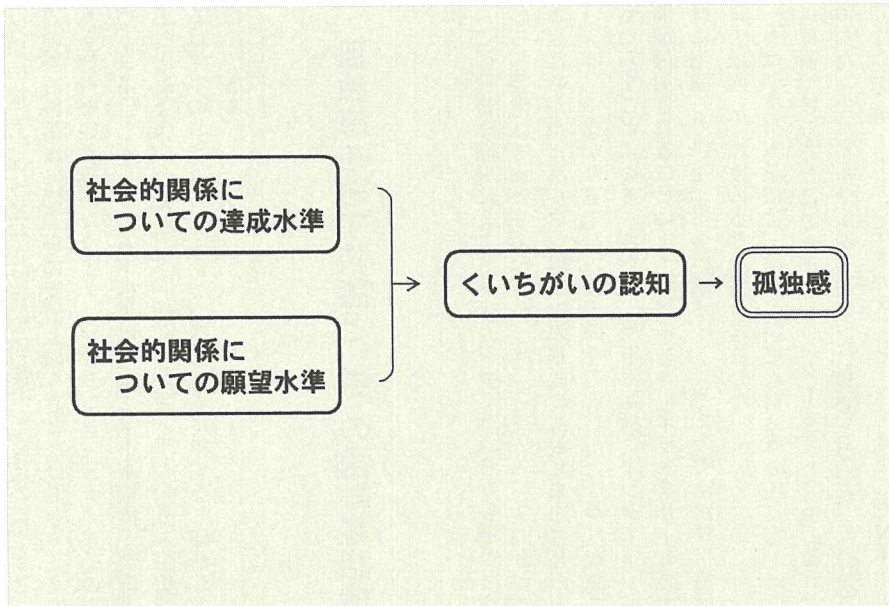


図 認知的くいちがいモデル (※1より)

（望んでいる状態）と達成水準（現に営んでいる状態）とのくいちがいの認知によって生起する日常的な情動体験である（※1）。つまり、その人が現在営んでいる対人関係の状態が、その人が望んでいる状態を下まわるほど、孤独感が強くなる。また、その人の対人関係が客観的には希薄なものであっても、その人が対人的接触を望んでいなければ、孤独感は生じない。

しかしながら、実は起きていることは決して「癒しの構造」ではない。「満たされない日常に由来する孤独」↓「親和欲求充足の強迫的な切望」↓「皮相なコミュニケーションの創出」↓「際限なき孤独感」という悪循環に、若者がはめ込まれていることである。このはめ込みの大きな原因の一つとして、教育社会やメディアによって刷り込まれる「対人幻想（『真の友だち』や「かけがえない恋人」など）」を挙げることができる。「理想的な対人関係」を「どこかで」手に入れることが「できる」し、そうする「べき」なのである。結果として、若者は孤独の迷宮の入り口に押しやられる。

ムスターカス（※4）は、「孤独に対する不安」と「実存的孤独感」を区別した。前者は、「生と死の重要な問題に直面するのを避けるために、絶えず他人との関わりを求め、忙しく立ち働いて、本質的孤独を打ち消そうとする防衛」に由来する。「実存的孤独」とは、「人間の本質に目覚めていることの証であり、生の動乱や悲劇、変転に直面してゆく際に育まれるもの」である。さらに、この「実存的孤独」に対して、「逃げることなく」、「身を沈め」、「なすがままに任せておく」ことによって、自覚と自己変革を成し遂げることができる。

「親指コミュニケーション」が繰り広げる風景は、ムスターカスの「孤独に対する不安」の顕れであるとすれば、安易な「対人幻想」からの脱却を試みるべきであろう。まさに自分が「ひとり」であることと戯れる「作法」を身につけるべきであろう。わが国の中世の草庵生活者は、「全くの孤独と果てしなき寂しさ」に身をおくことによって「人生に於ける最も高き美しき生活」に触れ得、草庵文学を創造した（※5）。

現代青年の心性の基本問題は、孤独であることではなく、実は「孤独に対する怖れ」にあるのである。

【文献】

- ※1 諸井克英 一九九五 『孤独感に関する社会心理学的研究』 風間書房
- ※2 諸井克英 二〇〇〇 情報通信の病理―親和コミュニケーションの彷徨― 廣井・船津（編）『情報通信と社会心理』 北樹出版 一五五―一七二頁
- ※3 諸井克英 一九九六 電話コミュニケーションと対人関係 川浦他共著 『メディアサイコロジ』 富士通ブックス 一五七―一九〇頁
- ※4 Moustakas, C.F. 1972 *Loneliness and love*. Prentice-Hall. (片岡・東山訳) 『愛と孤独』 一九八四 創元社
- ※5 石田吉貞 一九七〇 『改訂・中世草庵の文学「附篇」茶美の構造』 北沢図書出版